御伽草子の美人描写

――古来の美人にたとえる表現

染谷裕子

一　はじめに

御伽草子の表現が類型的であるという指摘は多くなされてきた。市古貞次氏によれば「主人公の生活・容貌といひ、悲喜の表現といひ、巻末の教訓といひ、その他至る所に類想が、あるいは類似の語句語調が、見出されるのであって、作品の個性が、独自なものが、みられない」[1]という。そして、御伽草子の決まり文句として具体的な表現が、各種注釈や論文等で指摘されてきた[2]。筆者自身も、御伽草子によく現れる語彙を通して決まり文句についてふれたことがある[3]。

ただ御伽草子といっても、広義で考えた場合（本稿でもそうであるが）数百編におよぶ作品が存在し、これら全体について「類型的」といえるのかという問題がつねにつきまとう。さらに、御伽草子の歴史は長く、鎌倉時代から江戸時代にまたがる。一つの作品について多くの異本が存在するのも特色である。また、その作品の内容も多岐にわたり、さまざまな分類がなされてきた。この「数」「時代」「異本」「分類」は、御伽草子の研究者を常に悩ませる問題である。

ここ数年御伽草子の研究論文をなすにあたって、筆者は広義の御伽草子と呼べる、できるだけ多くの作品を対象とし

てきた。その結果、異本調査や原本にあたるという基本的な研究を怠っているという反省がある。そのためには、個々の作品における着実な研究が必要であると確信はしているが、一方で常に「全体は……」という疑問がもちあがってくる。語彙や表現をあつかう場合、特にこの疑問が大きくなる。この問題は、幸若や説経、古浄瑠璃にも広がり、さらに中世文学作品全体にも広がってくるものであって、きりがないのであるが、しばらくは広義の御伽草子、具体的には『室町時代物語大成』（角川書店）に収められる四百編余りの伝本を対象に、御伽草子の表現の問題について研究をすすめていきたい。

さて、類型表現といっても、様々な表現があるわけであるが、その中でも美人を表現する場合について考えてみたい。御伽草子の美人描写については、市古貞次氏は三つに分類する。第一は「光るといふ語を以てする」方法、第二は「自然、月、花等に喩へ」る方法、第三は「日本・外国その他の古往今来の美人に喩へる」方法である。そして、御伽草子の美人描写は「大よそこの三つの方途を出でることはないといってよい」[4]とする。

以上の分類の中で、「古来の美人にたとえる」表現方法について、以下詳しく考察することにする。

二　古来の美人にたとえる表現方法

ここでいう「古来の美人にたとえる表現方法」とは、和漢天竺等の古来の美人を、一人または数人あげて、登場人物の女性をたとえる場合をいう。本稿では、この方法を仮に「美人例示」という呼び方をすることにする。なお、男性についても同様な表現が存在するがここでは除くことにする。[5]

用例採集の対象としたのは『室町時代物語大成一～十三』（角川書店）に掲載された四百十八篇の広義の御伽草子である。

(1)　美人例示の見られる作品

四百十八篇中六十五篇に美人例示の表現が見られる。異本を同一作品とみれば、四十六作品になる。この数について

の多少を議論する材料がないが、美人を表現する記述が出てくる作品全体を考えると決して多くはない。類型表現の一つとされる美人例示は御伽草子全体あまねくとは言いがたいのである。

さて、この四十六作品六十五篇をあげてみる。（　）の番号は『大成』における作品番号である。また、参考までに『御伽草子集』（新潮日本古典集成）の分類をあげておく。

①秋月物語（8、公家物・継子談）②朝顔の露（18、擬人物・継子談）③雨やどり（25、公家物・恋愛談）④いそざき（38、遁世物・妬婦談）⑤伊吹山絵詞（45、怪物退治談）⑥いわや（49、公家物・継子談）⑦瓜子姫物語（63、民間説話物）⑧かざしの姫（90、異類怪婚談）⑨神代小町（96、歌人伝説物）⑩唐崎物語（99、公家物・利生談）⑪貴船の本地（110・111、本地物・恋愛談）⑫きまん国物語（112、異国物・漂流談）⑬賢学草子（128、僧侶物、妬婦談）⑭恋塚物語・滝口物語（134・246、悲恋遁世談）⑮小男の草子（145、庶民物・恋愛成功談）⑯小式部（148、歌人伝説物）⑰小伏見物語・桜の中将（150・167、公家物・悲恋遁世談）⑱小町双紙（152・153、歌人伝説物）⑲木幡の狐（157、異類怪婚談）⑳酒の泉（169、祝儀物）㉑三人法師（180、懺悔物）㉒じぞり弁慶（189、弁慶伝説）㉓十二人姫（197、公家物・出世談）㉔秀祐之物語（200、異類怪婚談）㉕浄瑠璃御前物語（209・210、義経伝説）㉖雀さうし（217、異類物・求婚談）㉗千じゅ女（237・238・239、公家物・恋愛談）㉘玉藻の前（257・258・259、怪物退治談）㉙俵藤太物語（264、武人伝説物）㉚短冊の縁（265、恋愛談）㉛土蜘蛛草紙（278、怪物退治談）㉜七草姫（302、公家物・恋愛談）㉝鉢かづき（311・312、民間説話物・継子談）㉞花子ものぐるひ（316、謡曲物・恋愛談）㉟はにふの物語（322、公家物・恋愛談）㊱はもち（325、武家物・流離談）㊲姫百合（336・337、異類物・恋愛談）㊳ふくろう（342・343、異類物・悲恋遁世談）㊴文正草子（355・356・357・358・359、庶民物・立身出世談）㊵宝月童子（366、異国物）㊶堀江物語（374・375、武家物・復讐談）㊷松風村雨（380、歌人伝説物）㊸源蔵人物語（389、本地物）㊹村松物語（395、武家物・流離談）㊺弥兵衛鼠（402、異類祝儀物）㊻横笛草紙（406・407・408、源平物・悲恋遁世談）

また、解題によれば、本の形態・書写年代は次の通りである。（番号は作品番号）

＊室町末期までの古写本・古絵巻（慶長頃も含む）――18・49・110・112・128・145・152・200・209・210・237・257・278・322・374・389・406・407

＊古活字版――408
＊江戸期の写本――8・99・148・167・217・239・246・265・311・336・343・359
＊江戸期の奈良絵本・絵巻――25・38・45・63・90・96・150・157・169・189・238・258・302・325・342・355・357・358・366・395・402
＊版本――111・134・153・180・197・259・264・312・316・337・356・375・380

これらの作品を見て、内容的な偏りが顕著に見られるわけではない。ただ、怪物退治談・武人伝説・武家物・義経弁慶伝説など、武家に関わるものがやや多いように思う。

一方、明らかに気づくことは、本地物の類が少ないことである。児物語や説教法談物あるいは合戦物などが見られないのは、内容的にもっともであろうが、「阿弥陀の本地」「厳島の本地」「熊野の本地」「毘沙門の本地」などは、内容的には恋愛談や継子談であり、伝本も多くかなり流布したと考えられる作品である。美人例示の表現があってもよさそうであるのに、見られないのはなぜか。それは、本地物の性格によるからであろう。本地物は神仏の前世（人間の時代）を語るものである。従って、登場する美人は神仏の前身である場合が多い。神仏を古来の美人といえども人間を以て形容することに抵抗があったのではなかろうか。なお、美人例示の見える「貴船の本地」（111・112）と「源蔵人物語」（389）では、美人を吉祥天女にたとえている。吉祥天女が人間ではないからこそたとえが成立したのではないか。

また、公家物に含まれる作品の中で、平安や鎌倉時代の物語の改作である「狭衣の草子」「落窪の草子」「しぐれ」「一本菊」「若草物語」などにも、美人例示の表現が見えない。美人を描写する場合、これらの作品には概して類型的な表現が少ないように思われる。表現は単純化の傾向にあり、表現技巧は原作にははるかに及ばないものの、これらの物語は、たとえば、王朝文学において、湯原美陽子氏の言われるような「容姿美は主人公の情趣や風雅の心の表象であり、単に外面的な姿かたちを美の対象としていないのが王朝容姿美描写の特徴である」[6]という伝統を保ち続けていることが、次の「しぐれ」の例からもうかがうことができよう。中将が初めて姫君を見る場面である。誤写と思われる部分もあるが雰囲気は出ているので古写本より引用する。ここには美人例示はそぐわない。

まいりけかふの、かすおゝきなかに、としのほど、十五六はかりなるひめきみの、なのめならすうつくしき、ねうばうたち、四五人して、ぬらさしと、たちかくす

中将殿、是を御らんして、わかさゝせ給ひたる御かさ、六ゐのしんにて、おくらるゝ　ひめきみ、こわいかにと、おほしめして、見あけたまひつる、御目のうちの、けたかさ、あくまて、あいきやうかまして（あいきやうかましくて）、うつくしそ（うつくしくそ）、おはしける（183「しぐれ」永正写本）

(2)　たとえとしてあげられる美人の数

たとえとしてあげる美人の数は次の通りである。なお、美人の数は誤写がある場合特定しにくいのであくまでもめやすである。同一作品でも、数は異なる場合が多い。御伽草子の諸本は異同が激しい場合が多いが、この美人例示などは数・内容共に改変を加えやすい部分である。なお、種類の異なる美人例示が複数ある場合は、その合計数を示す。

＊挙げられる美人が一人の場合……13篇（99・110・111・145・167・169・197・322・355・374・389・395・406）

＊挙げられる美人が二人の場合……18篇（8・18・25・63・96・150・153・200・237・257・278・302・312・325・356・357・402・408）

＊挙げられる美人が三人の場合……13篇（38・45・49・128・152・239・258・259・264・358・359・380・407）

＊挙げられる美人が四人の場合……7篇（90・148・189・238・265・366・375）

＊挙げられる美人が五人の場合……5篇（157・180・210・217・246）

＊挙げられる美人が六人の場合……1篇（311）

＊挙げられる美人が七人の場合……1篇（112）

＊挙げられる美人が十人以上の場合……7篇（134・209・316・336・337・342・343）

以上を見ると、一般的には三人以下と考えるのが妥当であろう。先に示した、これらの伝本の書写年代から見れば、慶長以前の伝本は大体この三人以下の中におさまる。

一方、十人以上もの美人をあげるものが七篇（五作品）見られる。13番の「恋塚物語」は29人、209番の「浄瑠璃御前物

語」は14人、316番の「花子もの狂い」は36人、336番の「姫百合」は33人、337番の異本は23人、342番の「ふくろう」は11人、343番の異本は32人の美人を挙げる。「浄瑠璃御前物語」(209)を除いた六篇は江戸期の写本や刊本である。その作品の成立も『日本古典文学大辞典』(岩波書店)によれば「室町時代末期」または「江戸時代初期」とあり、伝本の傾向から考えても、これらの作品は御伽草子の長い歴史の中で、比較的成立の遅い作品とみてよい。一方「浄瑠璃御前物語」は室町時代末期の写本で、『大成』の解題によれば「諸本中最長篇」の伝本であるという。同じく『大成』に掲載されている、208番の室町時代末期の絵巻には美人例示はなく、210番の慶長頃の写本には五人の美人があげられている。「浄瑠璃御前物語」は伝本も多く本文の異同も激しい。209番が書写当時に改変を加えたものという可能性も十分ありうる。[7] このことと、先の六篇の事情をあわせて考えれば、十人以上の美人が列挙されるようになったのは室町末期から江戸初期と考えてよいのではないか。江戸初期に成立した仮名草子「恨の介」や「薄雪物語」にも、このような大量の美人列挙が見られる。次の(3)に述べるように、本来御伽草子の美人例示の役割は誰でも知っている有名な美人にたとえることによって登場人物の美しさを強調することにあったが、大量の美人列挙はその役割を離れてしまっている。近世の知識主義のあらわれと考えてよいだろう。

(3) 美人にたとえられる人物——御伽草子の代表的美人

今回の調査では美人にたとえられる人物として約百人の女性があがってきた。そのほとんどは、十人以上を列挙する場合に現れる美女である。大方の御伽草子に見られる美人例示は美人がかなり限定される。33頁以下の表1—①に美人例示として二篇以上に見える天竺・中国の美女を、表1—②に三篇以上に見える日本の美女を、その分布状況と共に示した。この中で、五篇以上に見える女性をあげてみよう。

まず、圧倒的に多いのが、楊貴妃と李夫人である。楊貴妃は五十篇に見え、李夫人は四十二篇に見られる。谷口耕一氏によればこの二人のたとえは『和漢朗詠集』巻上の源順の「楊貴妃帰唐帝思　李夫人去漢皇情」に由来するという。[8] この二人は次のように並んでたとえられることも多く、御伽草子の時代には誰でも知っている美人の典型であったことが

わかる。ただ、表中に△で示したように楊貴妃に比べて李夫人は誤写がやや多い。これは後に中国の代表的美人が楊貴妃に集約されていく兆候を表しているのではないか。（傍線は筆者。以下同。）

御としは、二十はかりにもや、おほえて、御くしたをやかに、御うちきの、すそにあまりて、こゝろ、ことはも、およひかたく、むかしの、りふしん、やうきひも、いかてかこれにまさるへき（25雨やどり）

さても、みやこにて、きゝおよひしよりは、まさりて、うつくしくそ、みえさせたまふ、かんの、りふしん、たうのやうきひも、これにはいかて、まさり給ふへきと、おほしめす（356文正草子）

次いで、衣通姫が二十六篇、小野小町が十七篇に見える。この二人は、御伽草子において我が朝の代表的美人である。御伽草子には小町をめぐる作品が多く、当初小町が圧倒的多数を占めると予想していた。楊貴妃のように遠い昔の遠い国の美人にたとえることがもてはやされたように、我が朝においても、衣通姫のように、より遠い昔の美女の方が、美人例示として効果的であったのかもしれない。歌風においてであるが小町自体「衣通姫の流れ」という記述が『古今和歌集』仮名序にあることも影響があろう。また、小町を美人例示としてあげる場合「恋塚物語」等には「小野小町の、わかざかり」とある。小町晩年の老醜伝説が題材となった御伽草子や謡曲は数多い。これらが小町を美人として挙げることにダメージを与えているのかもしれない。なお、この二人については、歌の名人として例える場合[9]にも多く見える。

市古貞次氏によって既に指摘されているように、以上の四人の美女が御伽草子の美人例示の典型といってよい。次の例などは典型的四人をうまくとりいれた例である。

ほとなく、十三にならせたまひけれは、いよ〳〵、みめかたち、うつくしく侍れはたうのやうきひ、かんのりふしん、わかてうにては、そとほり姫、をのゝ小まちなとも、これにはいかて、まさりなんとそ、人々申あひける（90かざしの姫）

この四人に、女三の宮（十二篇に見える）、吉祥天女（十篇）、西施（八篇）、朧月夜（八篇）、和泉式部（七篇）、染殿后（七篇）、二条后（五篇）、紫式部（五篇）が次ぐ。

中国の美女としては楊貴妃、李夫人、西施、天竺の美女としては吉祥天女、日本の美女としては、衣通姫、小野小町、

和泉式部、紫式部といった実在の人物、実在の人物ではあるが『伊勢物語』に関連する染殿后[10]・二条后、『源氏物語』の登場人物、女三の宮と朧月夜――以上の女性たちが御伽草子の美人例示の代表と言える。

女三の宮は次のように「女三の宮の立ち姿」と限定される場合もある。

ものによく、たとふれは、女三の宮のたちすかた、おほろ月夜の、なひしのかみ、かうきてんのほそ殿、たうのやうきひ、かんのりふじん……（210「浄瑠璃御前物語」[11]）

これらの女性に加えて多数の女性が登場するが、その殆どは、「恋塚物語」「浄瑠璃十二段草子」「花子ものくるひ」「姫百合」「ふくろう」に見える女性たちである。これらのいわゆる美人尽くしは、作品が異なれば、その列挙される女性も様々であり、内容的に相互に影響を与えながらも独自の記述がある。今その記述を修飾語句等を除いて最小限の形にしてすべてあげてみる。漢字に改められるものは改めた。誤写も多く、〔　〕に、正しいと思われる呼称または一般的な呼称を示した。

【恋塚物語】――吉祥天女・摩耶夫人・鬼の娘十郎姫・妹こんずのみや〔こんつによの宮〕[12]・西施・耶輸陀羅女・末利夫人[13]・うすいでん〔五哀殿〕[14]・そのれいしゃうじゃう？・はんしゃうふ〔班婕妤〕[15]・李夫人・すこうぐし？・楊貴妃・虞氏君[16]・玉より姫[17]・光明皇后・妹こうはく女[18]・中将姫[19]・小野小町・紀有常女・松風[20]・村雨・朧月夜・染殿后・野宮の御息所〔六条御息所〕・和泉式部・小式部・紫式部

【浄瑠璃十二段草子】女三宮・朧月夜・和泉式部・小式部・松浦さよ姫[21]・楊貴妃・衣通姫・鳥羽院后[22]・染殿后・勢至御前・吉祥天女・くわようふにう[23]〔花陽夫人〕・小野小町

【花子ものくるひ】楊貴妃・李夫人・妹喜[24]・妲己・褒姒・二条后・戚夫人[25]・虞美人[26]・西施・上陽人[27]・はんしゃうふ〔班婕妤〕・王昭君[28]・朧月夜・女三宮・紫の上・にようごの君〔藤壷女御〕・明石の上・あやめの前[29]・常磐御前・まこもの前[30]・小野小町・紫式部・和泉式部・かぐや姫[31]・小督殿・優婆塞の宮〔宇治八宮〕の娘・玉藻の前[32]・中将姫・小宰相・波のうねめ[33]・塩冶判官北の方[34]・静御前・祇王御前・仏御前・大磯の虎御前[35]・千手の前[36]

【姫百合】りきう〔驪姫？〕[37]・せいよう〔斉姜？〕[38]・楊貴妃・しをん？、きくひめ？（しおんきくひめ）・りうらん？、西

施、りくん?、さくひめ?（りうじんせいしさくひめ?）・さいちよ?、かうし?（さいちよかうし?）・王昭君・はんあんしんがはは、さいめい?（はんあんたんかはくさい）〔潘安仁が母?〕[39]・季珪が妹・（衣通姫）・女三宮・紀有常の娘[40]・染殿后・小野小町・なかよし卿の御娘・長良の娘（二条后）・せうのきょうの妹（はせをの御妹）・伊勢斎宮・筑紫染河の里の女・行平卿の娘・のむろの（おむろの）さいちう（さいてう）めつらしのまい（めつこしのまへ）・在原なかひら（なりひら）のむすめ・月かけ（つぎかげ）が娘ましこの前・紫の上（なし）・花散る里（なし）・にようこ〔藤壷女御〕（なし）・明石の上（なし）・朝顔斎院（なし）☆（　）には336の異本337の異同を示した。

【ふくろふ342】衣通姫・皆鶴御前[41]・小野小町・吉祥天女・松浦〔さよ〕姫・紫式部・小式部・和泉式部・小督局・大織冠の乙姫〔紅白女〕・楊貴妃

【ふくろうのそうし343】女三宮・朧月夜・楊貴妃・李夫人・松浦さよ姫・衣通姫・二条后・小野小町・染殿后・吉祥天女・波提夫人〔喬雲弥〕・あやめの前・まこもの前・玉虫[42]・班女〔班婕妤〕・こうぶ人?・龍宮の乙姫、こうひせん女[43]・大織冠の乙姫、こうはく女・熊野の別当の思い人[44]、めうごぶ人・紫式部・和泉式部・小式部・愛寿御前[45]・力寿御前・とつこ[46]、静御前・星の宮[47]・浄瑠璃御前[48]・常磐御前・筑紫豊後の国尼か関の麓、しやうしゅあんのひとり姫[49]・大磯の虎きやうたい・黄瀬川の亀鶴[50]

これらの女性たちは、先行の様々な文献に登場する女性たちである。明石の上、花散里、紫の上、藤壷女御などは言うまでもなく『源氏物語』の女性たちであり、「姫百合」の紀有常女以下めつらしの前までの十二人の女性たちは『伊勢物語』の古注釈にあげられる女性たちである。[51] 小督局・小宰相・千手の前・祇王御前・仏御前・玉虫御前・あやめの前・常磐御前・まこもの前・静御前・浄瑠璃御前・皆鶴御前などは、『平家物語』『義経記』あるいはこれらに基づく幸若や御伽草子、謡曲に関連する女性たちであり、大磯の虎御前、黄瀬川の亀鶴御前は『曽我物語』、塩冶判官北の方は『太平記』、松風・村雨・愛寿・力寿は謡曲の女性たちである。玉藻の前・中将姫・十郎姫・こんつ女・松浦さよ姫・五哀殿などは御伽草子や説経、こうはく女やたまより姫（真野の長者の娘とあるので「玉世の姫」の誤りか）は幸若の女性たちである。以上の他に中国の故事に登場する様々な女性たちがあげられる。ただ、これらの美女は『和漢朗詠集』や『平

家』『太平記』などを通しての受容と思われる。耶輸陀羅女・摩耶夫人・花陽夫人・末利夫人などの天竺関連の女性たちは『今昔物語集』などの仏教説話や御伽草子からの受容と考えてよいであろう。これらの女性の受容については今論ずるに足る用意がないのでここではこれ以上言及しないことにする。

とにかく多くの女性が美人尽くしでは挙げられる。出自不明のものもあり、誤写も多いのが特色である。いかに和漢天竺の多くの女性をあげるか――これが美人尽くしの狙いであったと思われる。

(4) 美人例示の結び方

さて、古来の美女をあげて登場人物をたとえることが美人例示の方法であるが、その表現の結びは大きく分けて二つある。第一の場合は美女をあげて、「いかでかこれにまさるべき」などと結ぶ場合である。すなわち、このような美女といってもこの女性にはかなわないと表現するのである。そこには登場人物の女性が古来の美女以上に美しいという認識がある。「いかで（か）これにまさるべき〔まさりなん等〕」「（登場人物）にはおよぶべからず〔まさらじ等〕」などがこれに当たる。左の三つ目に挙げた例のように特殊な表現も見られるが、殆どが「いかでかこれにまさるべき」という句で結ばれる。

御けしき、あくまで、しんしやうに、みへたまへは、これは、かんのりふしん、やうきひと申とも、いかてかこれには、まさるへきと御らんして、あきれて、たち給ふ（49いわや）

それ、むかしのやうきひ、りふしん、そとおりひめとやらんも、このひめきみにはよもまさしとそ、おほえける（239千手女）

らんけいのうちに、こうかんあさやかにして、やうきひのえんしよくをあさけり、ほうていのうちに、すいしゆこまやかにして、りふしんのへいしをさらす（258玉藻の前）

第二の場合は美女をあげて「かくや」などと結ぶ場合である。すなわち、古来の美女が生きているとしたら今ここにいるこのような女性をいうのだろうかと表現する場合である。そこには登場人物の女性が古来の美女と等しい美しさであ

るという認識がある。「かくや」の他「（古来の美女）とも疑ふべし〔いひつべし〕」や「（古来の美女）にことならず〔はぢぬ〕」などがこれにあたる。

中将殿、むかしの、やうきひ、りふしんも、かくやといにしへの事まて、おほしめしいてける（150小伏見物語）

かたちの、よき事は、りふしん、やうきひ、そとおりひめに事ならす（152小町の草子）

もろこし、けんそうくわうていのきさき、やうきひ、かんのぶていの、よなりせは、りふじんとも、いひつべし（157木幡の狐）

この二つの表現において圧倒的に第一の場合が多い。古来の美人もかなわぬ美しさと誇張することにこれらの表現の目的があったからであろう。

三

二で、古来の美人をあげ、それ以上である、またはそれにひけおとらないと述べる表現について考察してきたが、一方御伽草子では登場人物の女性を天人に例える表現も数多く見られる。仮にこれを「天人例示」と呼ぶことにする。美人例示の中には天人も含めてしまったが、吉祥天女のように固有名詞を出す場合は他の美人と同じ意識でたとえているように思える。それは、他の美人たちと同様に列挙されたり、次のように二の最後に述べた第一の場合の表現を以てたとえられるからである。

ひしやもんの、いもうと、きちしやうてんによにも、すくれたる、三十二さうを、くそくして、このあふきの絵にもはるかにまさりたり（110貴船の物語）

天人にたとえる表現では、「ひとへに天人の影向なるか」「天人の天下りたるか」などというように、第二の場合が圧倒的に多くなる。次のように二つ並んだ場合でも、美人は第一、天人は第二の場合の表現をとる。

まことにおもはゆけなる御ふせい、かんのやうきひ、そとおりひめかありさまも、是には、いかてまさるへき、天人のやうかうもかくやと見え給ふ（8秋月物語）

御伽草子の時代の天上界に対する考え方を表しているといえようか。

さて、古来の美人をあげ、それに勝る美しさであると述べ、さらに天人のようであるとすれば、最高の美人ができあがるわけである。この二種類の表現は最高の美人を表現する手段として一見ペアを成すかのように思われる。実際に共に用いられることも多い。しかし、美人例示は見られないが、天人例示が見られる作品をみていくと、ある傾向がみえてくる。これらの作品を列挙してみる。（なお、天人例示は男性の場合も当然見られるが、美人例示との比較のためこでは女性に限ることにする。）

①赤松五郎（7、業平伝説）②愛宕地蔵物語（22・23、縁起物・末子成功談）③姥皮（55、民間説話物・継子談）④かくれ里（89、異郷滞留談）⑤興福寺の由来物語（140、公家物・妬婦談）⑥子やす物語（156、本地物・怪異談）⑦ささやき竹（174、僧侶物・破戒談）⑧善光寺の本地（235・236、縁起物）⑨七夕の本地（248、異類怪婚談）⑩中将姫（268・269、公家物・恋愛談）⑪中書王物語（270、太平記物）⑫鶴亀物語（282、祝儀物）⑬鶴の草子（282、異類怪婚談）⑭花世の姫（321、民間説話物）⑮毘沙門の本地（329、本地物・天界遍歴談）⑯伏屋（350、公家物・継子談）⑰もろかど（400、武家物・流離談）⑱文殊姫（401、恋愛物・発心遁世談）

美人例示のほとんど見えなかった本地物や縁起物の類が見える。宗教性の色濃い作品においては、当然登場人物の描写は現実に存在した人間よりも天人を以て例示する方が効果的なのであろう。

くさむらの中に、あやしき人かけの、しけるほとに、ちかつきよりて、見はんへるは、あたりもかゝやくほとの、ひめきみの、たゝ一人、おわしけり、あまりに、ふしきにおほえて、つくつくと、見たてまつるに、なめての人とは、おほえす、三十二さうを、くそくし給ひて、まことに、みめかたち、人にも、こゑ給へは、もしてんにんの、やうかうし給ひつるやらんと、あやしくおもひて（21愛宕地蔵物語）

ひめみやは、しろきすゝし、十五はかりに、うすいろの、御しやうそくに、しろきはかまの、なまめかしきに、あふき、さしかさして、おはしませは、ひとへに天人かとそ、見え給ひける（329びしやもん）

また、次のように神仏に例える場合もある。天人例示と同様に考えてよいであろう。

なんてんを、御らんするに、てんぐはん、花かつらしたる女はうたち、くはんおんせいしの、なみいらせたまふかことに、なみいたり（235 善光寺の本地）

なお、大量の美人を列挙する作品の中「恋塚物語」「姫百合」「ふくろう」には天人例示は見えない。これらの作品の成立時期にはもはや天人例示の効果は薄れてしまったのだろうか。

ところで、美人例示も天人例示もあまり見えない擬古物語系の作品は、これらのかわりにどのような表現を用いるのであろうか。それは「この世の人とも思われず〔見えず〕」という表現である。

御かたち、世にすくれ、なのめならす、いつくしく、この世の人とも、おほえす（185 しくれ）

夜あけて、みかうしなと、まいるに、日のけさやかに、さし出たれは、みす、き丁、引あけて、み給ふに、けさは又つくろひ給はぬほとの、うちあかみ給へるは、さらに、この世のものとも見えす（191、しのびね）

ひめきみも、みめかたち、うつくしく、このよの、人ともをほえす、まことに、たとえんかたそ、なかりけり（334 一本菊）

天人のような美しさとは、表現の仕方を変えれば、この世のものとも思われぬ美しさであるから、これらもまた天人例示に近い表現であろう。ただ、天人という言葉を出さない（出す必要がない？）ところに、この表現の意味があるように思う。

四

御伽草子において、美人を描写する場合、特に天竺・中国・日本の三国にまたがる古来の美女を以てたとえる表現について考察してきた。その大体の内容等については、たびたび引用してきたように、市古貞次氏の指摘を出ることはなかったが、筆者としては特に作品の内容との関わりについて指摘できたように思う。

古来の美女を以て例える表現は御伽草子の類型表現の一つではあるが、必ずしも広義の御伽草子全体を覆うものではなかった。美人が登場する、本地物や縁起物の中では天女を以て女性をたとえることはあっても、楊貴妃・小町などの

人間を以てたとえることはなかった。それは、本地物や縁起物の宗教的な性格が関わっているように思う。また、前代の物語の系統を引く作品でも、美女を以て例える表現を見ることは少ない。これは、必ずしもこれらの作品が御伽草子の一面である朗読文芸としての性格を持っていなかったからではなかろうか。誰でも聞き及んでいるような美女を以て例える表現は、市古氏の述べておられるように聞き手に親しみを与え、誇張した表現ゆえに素朴な聴衆に感動を与えるという効果がある。[52]

「ただ人とも思はれず」「天人の影向もかくや」「楊貴妃・李夫人と申すともいかでかこれにまさるべき」という表現は、「この世の中ではあったことのない」美人という視点において共通しているように思う。同じ箇所で使うことも可能であるし、実際に見受けられる場合も多いが、「ただ人とも思はれず」は前代の、「天人の影向もかくや」は中世前期の、「楊貴妃・李夫人と申すともいかでかこれにまさるべき」は中世後期のとらえ方なのではなかろうか。美人尽くしの見られる頃には既に「天人の影向もかくや」の表現効果は薄れている。

（注）

（1）『中世小説の研究』（昭30・東京大学出版会）「第七章中世小説の諸問題」418頁

（2）国語学の関係では、松本宙氏が御伽草子や当時の類型的表現についてふれている。（『中世の語彙』「御伽草子の語彙」（昭56・明治書院）

（3）拙稿「御伽草子の共通語」（『調布日本文化』創刊号・平3・3）

（4）注（1）前掲書406頁

（5）男性の場合、美男子のたとえとして挙げられるのは次のように在原業平と光源氏が殆どである。

いとはなやかなる、にほひの、なへてならぬ、ふせいは、いにしへの、なりひら、ひかるけんしも、かくやとおほしくて（90かざしの姫君）

上さには、むかしの、ひかるけんし、なりひらかと、おほしき、うつくしく、しんしやうなるか、いま十七八と見えたるか、ひわをまへにおきて、おはします（359文正草子）

(6)『美の世界　雅びの継承』〔源氏物語講座7〕「源氏物語の容姿美」（平4・勉誠社）

(7)大東急記念文庫蔵の奈良絵本（森武之助『浄瑠璃物語の研究』〈昭37・井上書房〉に解題・翻刻）には、23人の美女があげられていて、森氏によれば「浄瑠璃」諸本の中で最多であるという。

(8)また、この二人が美人例示として利用された早い例として『雑談集』の例をあげる。ただし、その中心は、やはり御伽草子であるという。（『語文論叢』23・平7・11）

(9)従って、美貌と歌才に恵まれている女性をたとえる場合には、この二人が用いられるのである。

御かたちといひ、歌のさま、そとをりの、むかしをも、はちぬほとなり（16酒の泉）

御名をは、おと姫君と申て、ならひなき、美人にて、かかるあつまの、はてなれと、小野小町か、なかれをくみ　春は、花のかせに、あたなるをうらみ、秋は、月の雲かくれぬるをなけき、やまと歌に、心をつくし（265短冊の縁）

(10)染殿后については『伊勢物語』関連というよりは、美貌の染殿后と、その加持祈禱を担当する僧にまつわる説話（『今昔物語集』（二〇-七）等）からの受容と考えた方がいいかもしれない。御伽草子には老僧正が及ばぬ恋をしたというような、説話が物語中に挿入されていることが多い。

(11)ところで、例文に「かうきてんのほそ殿」とあるが、この文脈からは独立した一人のように思える。「ふくろう」（343）も同様な記述が見える。『御伽草子集』（新潮日本古典文学集成）の「浄瑠璃十二段草子」（底本は慶長頃古活字本）にも同様記述があるため、その注に「ここは朱雀天皇の中宮となった藤原源子のことか」とある。しかし、朧月夜との関連を考えると、「弘徽殿の細殿」は光源氏と朧月夜の出会った場所である。「鉢かづき」（311）には次のようにある。誤写があり読みにくい部分があるがそのまま引用する。

さてもふしきの、はちかつき、むかしきこへし、ひしんにわ、やうきひ、りやうしん（りふしん）、そとをりひめ、おのゝこまちかわきり（わかさかり）、かうきうてんの、ほそ殿に、おほろ月よの、ないしのかみ、女三のみやの、たちすかた、おとにはきゝし、めにはみねは、これにまさし

「弘徽殿の細殿」に下接する「に」を、場所をあらわす格助詞と解釈すれば筆者の疑問は解決する。さらに「花子ものくるひ」（316）から引用する。

花のゑんの夕月夜。こうきでんの、ほそどのにて。源氏の君と、ちぎり給ふ、おぼろ月夜の、ないしのかみ。

やはり、「弘徽殿の細殿」は場所と考えてよいのではないか。何らかの誤写によって順序が乱れ「浄瑠璃御前物語」のような記述となったのではなかろうか。本稿では「弘徽殿の細殿」を一人の人物として数えないことにする。

(12) 御伽草子「貴船の本地」に登場する女性。「こんつ女」。その姉が十郎姫。鬼国の藍婆惣王の娘。

(13) 天竺舎衛国の波斯匿王の后。奴婢の娘であるが美貌の持ち主。「恋塚」では「まつり」と記すが本来は「まりぶにん」。『今昔物語集』(二一二八)にその名が見える。美人例示としては、『本朝文粋』巻十一・詩序にある源順の詩文に「春酔和レ顔。末利夫人之色不レ異」(「三月盡日遊五覚院同賦紫藤花落鳥關關」)とある。

(14) 御伽草子「熊野の本地」に登場する天竺摩訶陀国の善財王の后。五哀殿の女御。

(15) 漢の成帝の后、班婕妤(はんしょうよ)を誤読したか。班女。「花子」の元となった曲「班女」は、帝の寵愛を趙飛燕に奪われ、自らを秋には捨てられてしまう夏の扇に例えたという詩(『文選』の「班婕妤怨歌行」)の影響が強いという。(岩波大系『謡曲集』上「班女」注)『和漢朗詠集』巻上・納涼に「班婕妤が団雪の扇　岸風に代へて長く忘れたり」とある。

(16) 幸若「和田酒盛」に、玄宗皇帝の第一の后とある。仮名草子「恨の介」にも見える。

(17) 「さて我朝の、びじんには、用明天皇の、たへぬ思ひに、あこがれて、はるはるくだらせ、たまひつゝ、草かり人となりたまひ、こいぢのやみを、はれたまふ、まのゝ長じやのひとりむすめ、たまよりひめとも、いふべきか」とあるが、この部分のみ他に比べて説明が妙に詳しい。内容から考えれば、幸若の「鳥帽子折」の中で語られる物語に見える「玉よの姫」である。記紀に見える「玉依毘売」と混同があるか。

(18) 藤原鎌足(大織冠)の乙娘、紅白女。幸若の「大織冠」でその美貌が中国まで聞こえ皇帝に嫁ぐという女性。御伽草子や幸若では、前の光明皇后を姉とするが、光明皇后は不比等の娘で鎌足の孫。

(19) 御伽草子「中将姫の本地」で継母に山中に捨てられる美貌の女性。古くから伝わる中将姫伝説を題材とする。古浄瑠璃や説経にも同内容の作品がある。

(20) 謡曲「松風」で行平に愛された美しい海女の娘。次の村雨は妹。

(21) 『万葉集』巻五の山上憶良の歌「遠つ人松浦佐用姫の夫恋に領巾振りしより負へる山の名」等を素材にした謡曲「松浦」に登場する美女。『太平記』巻十一「越中の守護自害の事付怨霊の事」にも「彼の松浦佐用姫が、玉島山にひれふりて、沖行く舟を招きしも、今の哀れに知られたり」とあることから、この歌を通して佐用姫伝説が広く流布していたのであろう。なお、

御伽草子に、松浦長者（古本系では伊勢屋長者）の娘さよ姫が父の死後貧苦の母のため身を売るという「さよひめ」という作品があり、こちらとも考えられる。「恨の介」には「さよひめ」とあるために、岩波大系の注では、御伽草子のさよひめとしている。「浄瑠璃」「ふくろふ」等では「まつらひめ」「まつらさよひめ」とあるので、筆者は憶良の歌の松浦佐用姫と考えたい。

(22) 鳥羽院中宮の藤原璋子（待賢門院）か。御伽草子「西行の物語」（161）に、西行が女院を垣間見て恋の病にふしたとある。

(23) 『平家物語』巻五「咸陽宮」に出てくる花陽夫人か。秦の始皇帝の愛姫で琴の名手。

(24) 妹喜は夏の桀王の后。妲己は殷の紂王の后。褒姒は周の幽王の后。これら美貌の后を寵愛したが為に国を滅ぼす原因になった。妲己・褒姒共に『十訓抄』『太平記』『曽我物語』にその名が出てくる。褒姒は『平家物語』巻二「烽火之沙汰」にも出てくる。「花子」にはこれらの記述にそって妲己・褒姒の説明がなされているが、妹喜についての受容は不明。

(25) 「かうそのせきふじん」とある。漢の高祖の寵愛した女性。自分の息子を太子に立てようとして呂公に恨まれ、高祖死後捕らえられ虐待を受ける。『源氏物語』賢木巻にその名が見える。

(26) 「かううの、ぐのびじん」とある。楚の項羽の美貌の愛姫。『和漢朗詠集』に「燈暗うしては数行虞氏が涙夜深けては四面に楚歌の声」とあり、これは『平家物語』巻十「千手前」にも引用されている。なお、「恋塚」の「すこうぐし」は、この朗詠集の「数行虞氏」を人名と誤解したものか。

(27) 楊貴妃が玄宗皇帝の寵愛を独占してから、別の宮殿に追いやられた美貌の女性。白居易の詩に「上陽白髪人」があり、これを典拠にした和歌や説話等が多くある。『和漢朗詠集』巻上・秋夜にも取られている。『平家物語』の「灌丁巻」に、「上陽人が、上陽宮に閉ぢられけん悲しみ」とある。

(28) 前漢の元帝の官女。匈奴との和親のために呼韓邪単宇に送られた。御伽草子は美女の代表というよりも、『平家』や『義経記』のように、この時の昭君の哀れな道行を登場人物の心情に重ね合わせて引用することが多い。

(29) 「かの源三位頼政が。さはべのまこも、水こえて。引わづらひし、あやめのまへ」とある。源三位頼政が秀歌によって院より賜った美貌の女房。御伽草子に同名の作品がある。『源平盛衰記』十六「菖蒲前の事」や『太平記』巻二十一「塩冶判官讒死の事」に見える。なお、「ふくろうのそうし」にある「あやめ」も同様と考えた。「恨の介」には「菖蒲、真菰に常磐御前」とあることから、幸若「伏見常磐」の冒頭に女競べで千人の中から選ばれた女性「菖蒲の舞」「真菰の舞」「とつこの舞（＝常磐御前）」によると岩波大系『仮名草子』の補注にある。「ふくろうのそうし」も、「あやめ」「まこも」と続くのでこちらの

方がいいかもしれない。但し、最初に例をあげた「花子」も「ときは御前」「まこものまへ」と続く。

(30) 注(29)参照。

(31) 「唐崎物語（99）」に「月の都の人」とあるのも「かぐや姫」と考えてよいだろう。

(32) 御伽草子「玉藻の草子」に登場する鳥羽上皇に寵愛された女性。美貌と博識で周囲の目をおどろかすが、実は人間をたぶらかす為にやってきた老狐の化身。

(33) 「いまは昔に、ならにちかき。さるさはの池に、身をなげて。みくつとなりし、波のうねめ」とある。『大和物語』（一五〇段）による。

(34) 『太平記』で、高師直に横恋慕された塩冶判官の美貌の妻であることはいうまでもないが、このあと「さはだのみやの、御むすめ」と切れて、段落が変わって「こうきでんの西のたい」と続くが、この二つは共に塩冶判官の妻の説明であることが、『太平記』の記述よりわかる。

(35) 『曽我物語』に登場する相模国大磯の遊女。曽我十郎助成の恋人。なお、「ふくろうのさうし」には「大磯の虎きゃうたい」とある。『曽我物語』には、虎の妹は「黄瀬川の亀鶴」とあるが、「ふくろう」では、この「虎きゃうたい」のあとに、「黄瀬川の亀鶴」をあげているから、これは当たらない。岩波大系本『仮名草子』の「恨の介」注から、これは、幸若「夜討曽我」に「大磯の虎が妹に、きしゆと申て、十六歳、宍戸の安芸の四郎に最愛せられ申し、御所中に有けるが」とあり、これを指すことがわかった。

(36) 『平家物語』巻十「千手の前」に登場する優美な女性。手越の長者の娘。捕らわれた平重衡の一夜の慰めをする。

(37・38) 晋の献公の美貌の后、驪姫（りき）の誤写か。『今昔物語集』（九-四三）の説話に見え、『太平記』巻十二に驪姫伝説が掲載されている。この中で、献公の前后斉姜（せいきゃう）の名が出てくるので、このあとの「せいよう」を斉姜の誤写と考えたがどうであろうか。

(39) 潘安仁は潘岳のことで、晋の時代の人。次の季珪は崔琰。共に美男であったという。『和漢朗詠集』下「妓女」に「容貌のかほばせは舅（おぢ）に似たり潘安仁が外甥（ははかたのめひ）なれば気調のいきざしは兄（このかみ）のごとし崔季珪が小妹（おといもうと）なれば」とある。何らかの誤解で「ははかたのめい」が「はは」になったのか。なお、「滝口物語」にも「はんなんしんがいもうと」とある。どちらにしろ、美男の血を引く者なのだから美女という認識なのであろう。『海道記』には矢

矧の遊君の容姿について「顔を潘安仁が弟妹に借りて」とある。

(40) 在原業平の妻。『伊勢物語』の古注釈では「筒井筒」の女性をはじめ、登場する女性を有常女とする場合が多い。以下、「つきかけがむすめ」までは、登場人物に実在の女性をあてたもの。(後の注51参照)

(41) 御伽草子「みなづる」に登場する鬼一判官の美貌の娘。義経と恋仲になって兵法の巻を手に入れる手助けをする。

(42) 『源平盛衰記』四二「玉虫立レ扇」に見える、那須与一が射た扇の的を立てた平家方の女房。幸若「那須与一」にも見え「日本一番の常葉に劣らぬ美人」とある。「恨の介」の美人尽くしにもある名。

(43) 未詳。幸若「大織冠」には、「竜宮の乙姫に、こひさい女と申して、並びなき美人たりしを」とある。

(44) 未詳。『義経記』巻三「態野別当乱行の事」に見える、弁慶の父、態野別当が奪い取って妻とした二位大納言の姫君か。

(45) 仮名草子「恨の介」にもある。謡曲「愛寿忠信」に登場する遊女。次の力寿も同様。

(46) 建礼門院徳子か。前後の関係から見ると幸若「伏見常磐」の「とつこの舞」を指しているのかもしれない。ただ、後に同一人物の常磐御前が出てくる。

(47) 仮名草子「恨の介」にもあげられている。「浄瑠璃」諸本に必ず見える名。その記述は様々で、笛の名手であったり、及ばぬ恋をされる高貴な女性であったりするが、大体は、天竺の結びの神として記されている。「浄瑠璃」の美人列挙の中には出てこない。御伽草子「七草ひめ」に「ほしの宮の口伝」とある。

(48) 御伽草子や古浄瑠璃の「浄瑠璃十二段草子」に登場する美貌のヒロイン。

(49) 未詳。「ふんこのくに」「ひとりひめ」とあることから、真野の長者の娘、玉よの姫か。注(17)参照。

(50) 『曽我物語』で王藤内の恋人として登場する遊女。大磯の虎、手越の少将と並び賞される遊君との記述がある。

(51) 『和歌知顕集』(書陵部蔵・伝為氏筆)に次のようにある。

鳥、かの十二人の女はたれ〳〵ぞ。はや、その名をあげ給へ。

風(コタフ)、第一ニハ雅楽のかみ紀有常がむすめ。第二ニハ忠仁公のむすめ、文徳天皇の后、そめ殿の后也。第三ニハ出羽郡司小野のよしざねがむすめ、小野小町也。第四ニハ閑院左大臣冬嗣のむすめ、仁明天皇の后、五条后也。第五ニハ中納言ながらのむすめ、清和天皇の后、二条の后也。第六ニハ中納言長谷雄卿のいもうと、恋じにの女也。第七ニハ文徳天皇の御むすめ、恬子、伊勢斎宮也。第八ニハつくしのそめがはの女、これには名なし。第九ニハ中納言行平のむすめ、清和天皇の更衣、貞数親王の御母也。

第十ニハ大納言登卿のむすめ、めづらしのまへ也。第十一ニハ周防守在原仲平のむすめ、やしなひいもうと也。第十二ニハ大和守藤原継蔭がむすめ、いまの妻女伊勢にありけるを、伊勢ぬきいだして、そのあとに后宮の上童ましこのまへをいれたる也。この十二人の女の、名をかへ、さまをかへて、このものがたりの中ニ、八十余段にみだれちりたるなり。

右にあげられる十二人の名と順番は「姫百合」とほぼ同様である。よって、「姫百合」の記述は、書陵部本系統の『知顕集』によるものと思われる。

片桐洋一氏によれば、鎌倉時代の『伊勢物語』注釈書の特色は物語の作中人物のすべてに実在人物の名をあてることであって、室町時代後期以降の注釈書では、こういう無理な解釈が否定されているという（『伊勢物語の研究』昭45・明治書院）。ただ、室町時代の注釈書『伊勢物語惟清抄』『伊勢物語愚見抄』『伊勢物語肖聞抄』『伊勢物語山口記』を見ると、紀有常女、染殿后、小野小町、二条の后、伊勢斎宮についてはあてはめている場合が見られる。御伽草子では、「姫百合」の他に「小町の草子」や「花鳥風月」でも、『伊勢物語』で業平と交渉を持つ女性は十二人であるとするが、「姫百合」のように十二人の女性すべてをあげることはない。

（52）注（1）参照

【表1—①】	吉祥天女	星の宮	耶輸陀羅女	楊貴妃	李夫人	王昭君	班婕妤	潘安仁母	季珪妹
8 秋月物語				○					
18 朝顔の露									
25 雨やどり				○	○				
38 磯崎									
45 伊吹山酒天童子									
49 岩屋				○	○				
63 瓜子姫物語				○	○				
90 かざしの姫君				○	○				
96 神代小町				○	○				
99 唐崎物語									
110 貴船の物語	○								
111 貴船の本地	○								
112 きまん国物語	○			○	○				
128 賢学草子				○	○				
134 恋塚物語	○	○	○	○	○		△		
145 小男の草子				○					
148 小式部				○	△				
150 伏見物語				○	○				
152 小町双紙				○	○				
153 小町のさうし					○				
157 木幡の狐				○	○				
167 桜の中将				○					

		吉祥天女	星の宮	耶輸陀羅女	楊貴妃	李夫人	王昭君	班婕妤	潘安仁母	季珪妹
169	酒の泉									
180	三人法師				○	○				
189	じぞり弁慶				○	○				
197	十二人ひめ				○					
200	秀祐之物語				○	△				
209	浄瑠璃御前物語	○			○					
210	浄瑠璃十二段草子				○	○				
217	雀さうし	○			○	○				
237	千じゆ女				○	○				
238	千手御前物語				○	○				
239	千手女物語				○	○				
246	滝口物語				○	△			△	
257	玉藻前物語				○	○				
258	玉藻の前				○	○				
259	玉藻の草子				○	○				
264	俵藤太物語			○		○				
265	短冊の縁				○					
278	土蜘蛛草紙				○	○				
302	七草ひめ				○	○				
311	鉢かづき				○	△				
312	鉢かづきの草子				○	○				
316	花子ものぐるひ				○	○	○	△		

		吉祥天女	星の宮	耶輸陀羅女	楊貴妃	李夫人	王昭君	班婕妤	潘安仁母	季珪妹
322	はにふの物語				○					
325	はもち				○	○				
336	姫百合				○		○		○	○
337	ひめゆり				○		○		△	○
342	ふくろふ	○			○					
343	ふくろうのそうし	○	○		○	○		○		
355	文正草子					○				
356	文正草子				○	○				
357	文正草子				○	○				
358	ぶんしやう				○	○				
359	文正草子				○	○				
366	宝月童子									
374	堀江物語									
375	堀江物語	○				○				
380	松風むらさめ				○	○				
389	源蔵人物語	○								
395	村松物語									
402	弥兵衛鼠				○					
406	横笛草紙				△					
407	横笛物語				○	○				
408	横笛滝口の草紙				○	○				

【表 1—②】

		衣通姫	小野小町	女三宮	朧月夜	和泉式部	染殿后	二条后	紫式部	小式部	紀有常女	松浦さよ姫	紅白女
8	秋月物語	○											
18	朝顔の露	○					○						
25	雨やどり												
38	磯崎												
45	伊吹山酒天童子	○											
49	岩屋												
63	瓜子姫物語												
90	かざしの姫君	○	○										
96	神代小町												
99	唐崎物語												
110	貴船の物語												
111	貴船の本地												
112	きまん国物語	○	○		○	○							
128	賢学草子	○											
134	恋塚物語		○		○	○	○		○	○	○		○
145	小男の草子												
148	小式部		○					○					
150	伏見物語												
152	小町双紙	○											
153	小町のさうし	○											
157	木幡の狐		○			○			○				
167	桜の中将												

		衣通姫	小野小町	女三宮	朧月夜	和泉式部	染殿后	二条后	紫式部	小式部	紀有常女	松浦さよ姫	紅白女
169	酒の泉	○											
180	三人法師	○	○				○						
189	じぞり弁慶	○	○										
197	十二人ひめ												
200	秀祐之物語												
209	浄瑠璃御前物語	○	○	○	○	○	○			○		○	
210	浄瑠璃十二段草子	○		○	○								
217	雀さうし	○											
237	千じゆ女												
238	千手御前物語	○	○										
239	千手女物語	○											
246	滝口物語			○									
257	玉藻前物語												
258	玉藻の前												
259	玉藻の草子												
264	俵藤太物語												
265	短冊の縁		○	○	○								
278	土蜘蛛草紙												
302	七草ひめ												
311	鉢かづき	○	○	○	○								
312	鉢かづきの草子												
316	花子ものぐるひ		○	○	○	○			○				

		衣通姫	小野小町	女三宮	朧月夜	和泉式部	染殿后	二条后	紫式部	小式部	紀有常女	松浦さよ姫	紅白女
322	はにふの物語												
325	はもち												
336	姫百合		○	○			○	○			○		
337	ひめゆり	○	○	○			○	○			○		
342	ふくろふ	○	○			○			○	○		○	○
343	ふくろうのそうし	○	○	○	○	○	○	○		○	△	○	○
355	文正草子												
356	文正草子												
357	文正草子												
358	ぶんしやう	○											
359	文正草子	○											
366	宝月童子	○	○										
374	堀江物語			○									
375	堀江物語	○		○									
380	松風むらさめ	○											
389	源蔵人物語												
395	村松物語			○									
402	弥兵衛鼠	○											
406	横笛草紙												
407	横笛物語												
408	横笛滝口の草紙												